

3代目 ANDREA氏を直撃インタビュー



 **第3弾**

イタリアの名門
CARACENI
(カラチェニ)

ローマ本店を独占取材

TOMMY&GIULIO CARACENI (トミー・エ・ジュリオ カラチェニ) の直系 ANDREA S. CARACENI (アンドレア・エッセ・カラチェニ) 氏 (29) にローマ・カラチェニ本店で直撃インタビューした。TOMMY&GIULIO カラチェニの創業者・TOMMY 氏 (82) が祖父にあたる。祖父・TOMMY

本当のエレガンスは、流行に関係なく存在

祖父から受け継ぐサルトリアの哲学



お洒落にきめている、アンドレア氏の幼少時代

氏は 2012 年に惜しまれながら引退し、自宅にて穏やかに暮らしているという。「本当のエレガンスは、流行に関係なく存在し、廃れることはない」というサルト(仕立て屋)の哲学を祖父から受け継ぎ、前向きに取り組むアンドレア氏に現状とこれからについて聞いた。

祖父のカリスマ性

——まず、祖父について

祖父(TOMMY)は一緒に働いてきた、たくさんのサルトたちに本当に親しまれていた。多くの人を惹きつけるカリスマ性というようなものを、引退するまで決して失うことはなかった。また、どんな有名人や、社会的に高い地位にある人が来ても、常に家庭的な雰囲気のを漂わせ、気さくで気の利いた対応をし、

海外トピックス（ローマ・カラチェニ）

冗談を言い合って、彼らとの会話を楽しんでいて。単に洋服を作るためだけではなく、くつろいで過ごせる場所としての空気を生み出していた。それは、イタリアの大統領が来たときにも、決して変わることはなかった。

——仕事の流儀、哲学とは

祖父から受け継いだのは、「本当のエleganceは、流行に関係なく存在し、廃れることはない」という、仕立て屋としての哲学です。幼少の頃から、祖父や父に付き添われ、当たり前のように工房に出入りしていた。祖父は気さくな人であったし、工房の雰囲気も大好きであったが、その頃、サルトになる気はなかった。多くの若者と同じように、18歳で高校を卒業すると、大学に進んだ。専攻はバイオロジ（生物学）。しかしながら、数カ月後、専攻に違和感を覚え、退学した。

大学を辞め工房へ

——大学を辞めて、職人を目指した…

工房に入ることを決意したが、職人としてはまったくゼロからの出発だった。それでも受け継がれた血筋のせいか、半年も経つと、この仕事が自分の仕事だという確信を持った。

工房の職人に付いて、服作りの過程をひと通り習得した。同時期に、Accademia Nazionale Dei Sartoriの裁断のコースも受講した。

——ずっと工房で修業を

いいえ。20歳の時に、ロンドンへ渡り、MAURICE SEDWEL (SAVILE ROW)の工房で4カ月間修行し、イタリアではない国での仕立て屋、異文化について見

聞を深めた。**プラートで高級既製服のデザインと生産も**
ロンドンから

ローマへ戻り、祖父と裁断士の GIANCARLO TONINI (ジャンカルロ・トニーニ) 氏に付いて、さらに4年間、裁断、縫製の修行を続け、ジャケット、パンツ、ベストについても学んだ。2011年には、トスカナ州の繊維産業の街、プラートで高級既製服のデザインと生産を学んだ。翌年、デザイナーの



写真上は、祖父のトミー氏(右)とフィアット元名誉会長のジャンニ・アニェリ氏。右は若き頃のトミー氏

F A B I O
Q U A R A N T A
(ファビオ・クアランタ)氏と共同制作において、私のデザインが起用され、2013年の春夏、秋冬、2014年の秋冬のコレクションを担当した。この経験により、サル



トリアだけではなく、ファッション業界や既製服についての理解を深めた。

——注文服に対する固定概念を破

壊する

既製服を学んだ後、再度、工房へ戻り、サルトたちに囲まれながら仕事をし、自らのスタイルを発信するための研究、準備を進めてきている。現在は、CARACENIの名を継ぐ者として、工房を存続させるために、時代に適合した経営を考えている。そのひ

海外トピックス（ローマ・カラチェニ）

とつの可能性として、CARACENIのエッセンスを既製服に落とし込んだ企画商品の可能性も探っている。そのために、昨年から南イタリアの工場と提携し、試験的に既製服の生産を開始した。

従来のクラシックな、注文服としての高級服と、時代に適合した、既製服としての高級服の2つのラインで、CARACENIのエレガンスを次の世代にも継承していけるよう、柔軟に、必要によっては、これまでのサルトリアとはこうあるべ

試験的に既製服の生産も



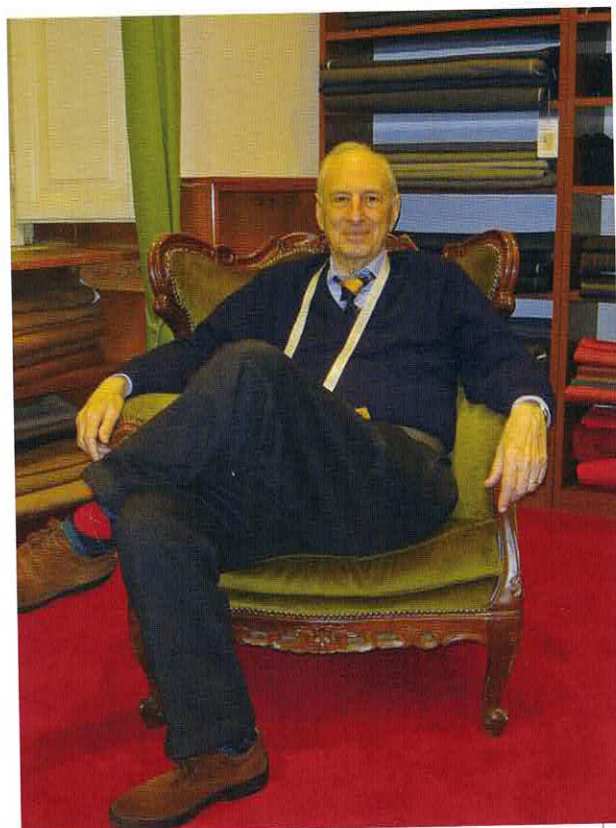
ものづくりの環境を時代に合わせて修正

き、とでも言うような固定概念を破壊したいとも考えている。つまり、完ぺきな服を仕立て上げるまでには、少なくとも3回の仮縫いを必要とするため、最低でも4回の来店が必要である。イタリア国外の顧客を相手にするためには障害でもあった。この点を考慮し、仮縫い回数を減らす試みもしている。

——あくまでサルトリア流を

私の根本にはサルトリアと、その工房、そして職人がある。それは、経営とはいっても、単なる「金儲け」を目的とするものでは決してない。幼年から工房に出入りし、肌で感じ、言葉を介さずに受け継いできた、イタリアのサルトリアの文化というものを、自らの立場から見える範囲で、できる範囲で、状況を変えながら、大切なものを残そうと考えている。自分と同じ名を冠することになる洋服は、目の届く範囲、手の届く範囲で作り、顧客の元へ届ける。形の違いはあっても、自らの責任において生産し、納品することは、あくまでもサルトリア流といえるだろう。

昨今はライセンスビジネスなどという、「名前を売る」ようなことが平然と行われている。どこで、どのように作られたのかすら、明確でないものに、「大きな名前が乗る」ことで、まるでそれが本当に大切に作られたものであるかのような錯覚を起こさせるようなことは、ものづくりの環境を悪化させる。サルトリアの経営というのは、ものづくりの環境を、時代に合わせて修正し、常に更新し続けていくことでもある。この試みは、まだ始まったばかりだが、この夏には、



写真はアンドレア氏の仮縫い(上)と祖父トミー(下)

幾つかが形になる予定である。

【取材を終えて】

伝統を守るには、時代を見据えた革新が必要であることを、アンドレア氏への取材を通して教えられた。若い世代は技術を学ぶとともに、自らの感性と知恵を駆使して、時代を乗り越えなければならない。